

崖の上で踊る

石持浅海

第九回

第五章 敵と味方

視線が交錯こうさくした。

しかし誰も目を合わせようとしない。お互いがお互いの様子を窺うかがっている。そんな感じだ。

仲間たちを殺害したのは、いったい誰なのか。

雨森あめもりの問いかけは、四人が殺された今になって、あらためて聞く者に現状を認識いちはしさせた。

「一橋さんが殺されたときから、当然考えなければならぬ問題だった。それなのに、今までは深く考えないでいた」

雨森が静かに続けた。反省の弁だけれど、悔恨の響きはない。

「もちろん、僕たちにだって言い分はある。考えなかった理由は、いくつもあるんだ。まず、一橋さん殺しは裏切り行為ではないと吉崎さんが話して、説得されてしまったこと。裏切りでなく復讐の一環だから、犯人捜しをする必要はないと考えてしまった」

そして、ちらりと亜麻音を見る。

「吉崎さんが殺害されたときには、亜麻音さんが戦闘モードバリバリになってしまった。そのため犯人が誰かよりも、亜麻音さん対それ以外という構図ができてしまった。それでは公平な視点での犯人捜しができない。これは、亜麻音さん一人の問題でなく、構図を作ってしまった僕たち全員の責任だ」

亜麻音は嫌な顔をしたけれど、ある程度理性が戻っている現在は、自覚があるのだろう。口に出して反論はしなかった。雨森も反省の言葉を期待していたわけではなかったようだ。間を空けずに話を続ける。

「僕たちがまだ復讐の最中だということもある。僕自身がくり返し主張していることだ。何より大切なのは、復讐の確実な遂行なんだ。犯人捜しよりも、事件が復讐に与える影響の方が重要だと思った。犯行の動機が復讐の妨害なら、一刻も早く犯人を特定して妨害の要因を取り除かなければならない。けれどその仮説も、完全に腑に落

ちているわけではない」

「なにより、時間がなかったね」

沙月さつきが後を引き取った。

「昨日の夕方に一橋さんが、今朝方に吉崎さんと菊野きくのさんが死体になつていた。午後三時過ぎに瞳ひとみさん。ほぼ半日ごとに死体が製造されていくわけだから、落ち着いて犯人捜しをする余裕なんて、あるわけない」

沙月の言うとおりで。とはいえ、思考停止状態というわけではない。その前に自分たちが笛木ふえきを殺害しているからか、パニック状態に陥っていない。だからあらためて問題提起されると、自然と思考が回っていく。

この保養所に潜入したときには、仲間は十人いた。それが今は六人になっている。フウジンブレードへの憎しみを共有し、標的の三人を殺害する計画を共に練っていた、大切な仲間だ。仲間のはずだ。冷静で合理的な提案を重ね、復讐計画を練り上げた功労者、雨森。最も復讐心を露あらわにしていながら、仲間に対しては、きちんと気遣いをしてくれる江角えすみ。

酷薄こくはくな笑みが怖いけれど、実はけっこうウマが合っている沙月。

メンバーの中ではいちばん常識的な反応や言動をしながらも、非常識な復讐に対しては熱心に行動する千里ちさと。

吉崎を盲信もうしんしているために視野が狭いが、骨身を惜しまず働く亜麻音。

絵麻えまは自分が犯人でないことを知っているから、犯人はこの五人のうちの誰かということになる。とても仲間を殺しそうにない面々だと思うけれど、誰が犯人であつても納得してしまえる気もした。

江角が両手で頭を搔かいた。

「ビールを飲みたい」

全身の視線が江角に集まった。反応は二種類に分かれている。ひとつは「自分も飲みたい」であり、もうひとつは「こんなときに、何を言っているのか」だ。「自分も飲みたい」派の雨森が掛け時計を眺めた。午後四時五十七分を指している。

「五時前か。江角さんは中道なかつちを襲う担当だよね。明日は早起きして車を運転してもらわなきゃいけないから、アルコールを残すわけにはいかない。飲むなら今から飲んで、早めに切り上げるという手もある」

言葉の内容は賛成しているものの、表情と口調は反対していた。雨森はその理由を説明した。

「でも、今はやめておいた方がいいだろうな。酔った勢いで、きちんと検証をしないまま、誰かに疑いが集中する危険がある」

「賛成だね」沙月が長い髪をかき上げた。「飲みたい気持ちはわから

ないではないけど、危険すぎる」

「ビールくらいで理性を失ったりしないよ」江角は不服そうに言ったけれど、それでもビールを取りに行こうとはしなかった。

代わりに雨森が腰を浮かせた。

「でも、何か飲みたいってのはあるな。各自、勝手に飲み物を確保しよう。僕は、面倒くさいから、自販機で何か買ってくる」

立ち上がって食堂を出て行った。一度部屋に戻って財布を取ってきて、玄関ロビーにある自動販売機に向かうのだろう。隣にあるキッチンに向かうのと、どちらが面倒くさいかわからないけれど、安全を考えたのかもしれない。瞳まで殺害された以上、犯人が皆殺しを狙っている可能性が高まったように思える。昼食休憩の隙に、一杯立てのドリップコーヒーやティーバッグにも仕掛けをされている危険がある。

同じことを考えたのか、江角と亜麻音は立ち上がって食堂を出て行った。一方、危険をあまり気にしていないのか、沙月と千里がキッチンに向かった。自分はどうぞしよう。喉が渴のどいてるのは確かだ。熱い紅茶や冷たい缶コーヒーなどではなく、ペットボトルのお茶か何かを飲みたい。キッチンには、まだ未開栓のウーロン茶があったはずだ。それでいいだろう。沙月と千里を追ってキッチンに入る。同じことを考えていたようだ。千里がレジ袋から二リットルのペッ

トボトルを取り出していた。

「開けるよ」

そう宣言して、キャップを回す。キリツと音がして開栓された。外したキャップをテーブルに置く。キャップに細工されたような痕跡せきはなかった。このウーロン茶は、安全だと考えていいだろう。食器棚から自分の分のグラスを取って、一応洗い直してからウーロン茶を注いだ。この場でグラス半分飲む。飲んだ分を注ぎ足して、食堂に戻った。ちようど、自動販売機組が戻ってきたところだ。

「そうか、その手があったか」

ウーロン茶の入ったグラスを見て、雨森が悔しそうに言った。雨森の手には、五百ミリリットルのペットボトルが握られている。ウーロン茶だ。ムダに百五十円を使ってしまったことを後悔しているようだ。その小市民的な後悔は、雨森がきちんとものを考えられる精神状態であることを示しているような気がした。

あらためて全員が着席する。今自分たちが使っているテーブルは、四人掛けのテーブルをつなげて、長くしたものだ。長辺に四人ずつ、短辺に一人ずつが座る、十人掛けになっている。十人で潜入したからだ。しかし現在は、長辺の真ん中辺りと、短辺の片方が空いている。吉崎、菊野、瞳、一橋が座っていた席だ。六人に人数が減ったわけだから、テーブルのサイズを半分にしても事足りる。しかし誰もそ

うしようとは言わない。単に面倒くさいからか、それとも仲間の不在をしつかりと意識したいからか。

雨森がペットボトルのウーロン茶を飲んだ。

「どんな理由か知らないけど」そう切り出した。「こうも仲間が次々と殺されるというのは、由々しき事態だ。特に、瞳さんは警戒していたにもかかわらず、殺されてしまった。この事実は、重く受け止めるべきだと思う」

「瞳さんには、後ろ暗いところがあったじゃないの」沙月が返した。

「それは、関係ないの?」

「あるかもしれない」雨森は答えた。「瞳さんについて、もう少し考えてみようか。瞳さんは、吉崎さんや菊野さんと同じ殺され方をしている。でも、違っているところがふたつある。ひとつは、自分の部屋ではなかったこと。もうひとつは、口に免許証が突っ込まれていたことだ」

「免許証は、沙月さんが言った後ろ暗いところだよね」絵麻が応える。「本名がひと目でわかるものだから」

「そう思う」雨森が同意する。「口に突っ込むという行為の意味は、よくわからないけど」

「少なくとも、俺たちに見せるためじゃないよな」江角が後を引き取る。「殴られた痕跡を探そうと、たまたま顔を上げさせたから見つ

かった。あのまま触らなかつたら、俺たちの目に触れることはなかった。その可能性だって、十分あったわけだし」

「江角さんが犯人で、みんなに見せる目的でわざと顔を上げさせた可能性もあるけどね」

沙月が意地悪な口調で切り返す。びくりと亜麻音が反応する。

「よしてくれ」江角が傷ついたような顔になった。「顔を上げさせたのは、雨森さんの頼みだぞ」

「うん、そのとおりだ」雨森は素直に認めた。「そういえば、免許証のおかげで、痕跡捜しどころじゃなくなってしまった。まあ、それはいいや」

雨森の表情や口調からは、動揺はみじんも感じられない。

「僕が犯人でも江角さんが犯人でもいいけど、考えるべきは、犯人の目的だね。犯人は、瞳さんの口に本名がわかる免許証を突っ込んで、何がしたかったのか」

「アピールじゃないんですか？」亜麻音が、なぜそんなことを疑問に思うのかといった顔で答える。「瞳さんが裏切り者だということを、みんなに知らせるために」

「だったら、死体の脇わきに置いておけばいい」

雨森が指摘した。「わざわざ口に突っ込んで、その上で顔を上げさせる必要がない。むしろ、ひと目でわかるようにする方が自然だ」

亜麻音が返答に詰まる。代わって沙月がコメントした。

「確かに、犯人がわたしたちにアピールしたかったのは、違いかもね。むしろ、瞳さん自身に対する制裁のように思える。お前は裏切り者なんだと。ちよつと、マフィアっぽいけど」

「そつちの方が、納得できる」千里が賛同した。賛同しながらも、表情は納得していない。首を少し傾^{かし}げて続けた。

「でも、なんか変じゃない？ 犯人は、わたしたちの仲間を次々と殺している。復讐の妨害のためじゃないかって、みんな言ってるよね。犯人は瞳さんが裏切り者だって知ってた。裏切り者を制裁のために殺すのは、むしろ復讐者側の理屈だよ。結局犯人は、裏切り者なのか、それとも復讐者なのか。どっちなんだろう」

全員が黙った。千里の指摘は、事件全体を覆^{おほ}うもやもやを、正確に言い表していた。

犯人は、復讐を妨害しようとする裏切り者。吉崎と菊野を相次^{あいっ}いで殺害した以上、その可能性が最も高いと思っていた。しかしもう一人、瞳がフウジンブレード側の人間ということが判明した。瞳の正体と死によって、事件の構図がまたわからなくなった。

「確かに」江角が難しい顔で宙^{ちゆう}を睨^{にら}む。「復讐の妨害が目的なら、犯人にとって瞳さんは味方だ。殺す理由はない」

「それって、犯人が前もって瞳さんの正体を知っていたことが前提

だよね」

絵麻の問いかけに、江角は宙を睨んだまま答えた。

「そうだと思う。免許証は普通、財布かパスケースに入っているものだ。殺害した後に気づくとは考えにくい。以前から知っていて行動したんだろう。瞳さんが自分の部屋以外で殺されてたのも、その辺りに関係がありそうだし」

「っていうと？」

ここで江角は視線を戻した。全員を見回す。

「普通に瞳さんの部屋をノックしても、警戒している瞳さんは素直に開けてくれないだろう。チェーンロックもあることだし。だから呼び出した」

「呼び出した？」千里が眉を吊り上げた。「警戒しているのに、この部屋を出たっていうの？」

「そうだね」絵麻も千里に賛同した。「相手が犯人だと考えなかったのかな」

「そりゃあ、考えただろうさ」江角は得意げだった。「でも、考えたとしても、出ざるを得ない。相手が瞳さんの本名を告げて『裏切り者、あんたが犯人じゃないのか』と責め立てたら、瞳さんは説得しなかりゃいけない。さつき雨森さんが言ったように、瞳さんは犯人じゃなさそうだし。犯人じゃないけど、西山の家族にしやまというだけで、犯

人の資格は充分だ。本人にも、その自覚はあっただろう。犯人にされないためにも、瞳さんは犯人に誘われるままに行動しなければならなかった」

千里の目が納得の光を浮かべた。

「そうか。犯人は、瞳さんを菊野さんの部屋に呼び出したのか」

「内緒話をするには、それがいちばんいい選択だ」

かんはつ
間髪入れずに江角が答える。

「他人目ひとめを考えると、廊下はもちろん、食堂も使いたくないだろう。瞳さんを殺すつもりだったのなら、自分の部屋も使いたくないはずだ。他の部屋の中でも、菊野さんの部屋なら、瞳さんも思い入れがある。おびき出しやすいんじゃないかな」

おお、と声上がる。江角の意見に正しさを認めた声だ。

江角の顔が活き活きとしている。今現在は、頭が働いているらしい。フウジンブレードに対する恨みうらみのために頭が固くなっているものの、元来頭の回転が鈍い人間ではない。一度思考が回りだすと、どんどん解答が導き出されていく。そんな状態なのだろう。

「うん」黙って江角の講釈を聞いていた雨森が、小さくうなずいた。「菊野さんの部屋でなくても瞳さんは行かざるを得なかったとは思うけど、納得あいかぎできる意見だ。合鍵が管理人室にあることはみんな知っているから、どこの部屋にも出入りすることができる。犯人も瞳

さんも他人目を憚はばかる話をするわけだから、ドアの開け閉めも廊下を歩くのも静かにやるだろう。僕たちが気づかないのも当然だ」

そしてぐるりと仲間たちを見回した。

「この方向から、犯人像が絞しぼれないかな。まず、瞳さんの正体を知り得たのは誰か、とか」

「誰にでもできたんじゃない？」

沙月が素っ気なく言った。「だって、瞳さんがブランドものを身につけていたことは、みんな見てる。菊野さんと食事に行っておごったことも、みんな知ってる。怪しいと思ってこっそり調べてたとしても、不思議はない」

「そうだね」絵麻も同意する。「打ち合わせや飲み会のときに、瞳さんがトイレで席を外したタイミングで、こっそり免許証を確認することは、誰にでもできた」

「俺は、完全にスルーしてたぞ。瞳さんが怪しいなんて、これっばつちも思っていなかった」江角が言いながら、弱々しい表情を浮かべた。「って言っても、誰も信じてくれないか」

「うん。信じない」

明確に雨森が言って、江角がのけぞる。間の抜けたやりとりにより、空気が緩んだ。

「瞳さんの正体を知ること、誰にでもできた」

雨森が口調を戻して言った。「じゃあ、順番はどうだろう。どうして犯人は、瞳さんを次の犠牲者に選んだのか」

「そりゃあ、乗ってきやすかったからだろう」

冴えている江角が、すかさず返す。「警戒している中で部屋をノックされたら、まず犯人だと疑う。さっきも話したように、簡単にドアを開けたりしない。犯人は、それでもドアを開けさせる必要があった。瞳さん相手なら、それができた。手っ取り早く殺しやすい人間を選んだんだと思う」

「そうだね」江角の意見は賛成できる。「大声を出されても困るし、みんなを呼ばれても困る。後ろ暗いところがある瞳さんだからこそ、犯人の誘いに乗ってしまった」

沙月も千里も亜麻音も、うんうんとうなずいている。雨森もひとつなずいて、口を開いた。

「僕もそう思う。じゃあ、これからはどうするんだろうね。明日の早朝には、僕たちは中道と西山殺しを決行してしまう。それまでに止めようと思ったら、今夜しかない。夜になって、それぞれの部屋に引っ込んだ後だ。でも僕たちは警戒しまくっているわけだから、瞳さんレベルの秘密を嗅ぎつけられていないかぎり、犯人の接近を許さないだろう」

「そんなこと言って」沙月が薄笑いを浮かべた。「絵麻さんが『怖

いの』って涙ながらに訴えたら、雨森さんだってほいほい中に入れてちやうんじやないの？」

「ああ、それは入れるかな」あつさりと雨森が答えた。自分が雨森の部屋に入る光景が浮かんで、心臓がどきりと鳴った。しかし雨森はすぐに首を振った。

「でも、それはないだろう。うちの女性陣は、みんな肚はらが据すわっている。仲間が殺されたくらいで怖がったりしていない。むしろ『犯人がわかった』と言われた方が、部屋に入れやすいと思う」

拍子抜けした。さっきのどきりを返せ。

「そんなに、簡単に信じるの？」

「言い方次第だろうな。絵麻さんが『江角さんと沙月さんと千里さんと亜麻音さんの共犯だ。信じられるのは雨森しかない』とか言ったら、信じるかもしれない」

そこまで言うてから、雨森は生き残ったメンバーを見回した。

「これで、この手段は通用しなくなったよ」

どうやら、犯人に対して言っているらしい。千里が安心したような不安を抱えているような、複雑な表情になった。江角が話をつなぐ。

「時間的な制約もあるな。犯人は昨夜、吉崎さんと菊野さんの二人を殺している。犯人が一人だとすると、今夜中に自分以外の五人を

殺さなければならぬわけだ。しかも、警戒している五人をだ。犯人はどうやるつもりなんだろう」

「犯人がマシンガンでも持っていたら、簡単なんだろうけどね」

沙月がコメントし、江角が嫌な顔をした。「よしてくれ。そんなもの持つてるんなら、はじめから乱射して終わらせてる」

「そりゃ、そうだ」沙月が舌を出した。「でも、部屋に引込んできて動くとは限らないでしょ。それって、他の人にばれないよう、静かに殺すのが目的なんだから」

喋りながら、沙月が不審げな顔をした。自分の言葉に引かかったような顔。しかし正体をつかめなかったのか、そのまま続ける。

「それじゃあ、一人ずつしか殺せない。時間がないんだったら、この場で一気に襲いかかって決着をつけようとするかも。もし、それなら——」

沙月が上目遣いになった。「雨森さんと江角さんが怪しいね。なんといつても男の人だから、力が強い。女を押し倒すくらい、簡単でしょ」

「それ、表現が違う」雨森がぱたと手を振った。「男だから力が強いって、そんなことはないよ。僕も江角さんも、みんなと比べてそれほど優位性があるわけじゃない。頑健な吉崎さんや、きついバイトをやってたおかげで腕力がついた菊野さんならともかく」

沙月が笑った。

「まあ、そういうことにしときましょ。実際、今までの殺人だって、特に力が必要なわけじゃなかったしね。一橋さんは眠っている間だったし、吉崎さんと菊野さんは仲間をまったく疑っていない状態だった。瞳さんは警戒していただろうけれど、格闘したわけじゃなさそうだし。懐中電灯で頭を殴ることなんて、誰にでもできる」

「なんだ。わかっていて発言したのか。沙月が表情を戻した。」

「でも現実的に考えると、一人ずつ殺していく時間的余裕がないんじゃない？」

「犯人の目的が全滅ならね」

雨森が答え、沙月が怪訝な顔をした。雨森は、沙月が怪訝な顔をしたことに対して怪訝な顔をする。

「さつきからずっと話していることだよ。犯人の目的は、復讐の妨害に見える。復讐を止めるためには、メンバーを全員殺さなければならぬ。そのとおりで。でも、復讐の妨害が目的ならば、どうしても味方の瞳さんを殺したのか。その説明ができていない以上、復讐の妨害が動機かどうか、わからないんだ。そうでなかった場合、全員殺害を狙っているとは限らない。まったく別の動機なら、犯人はもう目的を達しているかもしれないだろう？」

沙月が納得すると同時に、渋い顔になった。「要は、何もわかって

いないってことね」

「そうだよ」雨森があっさり答える。「でも復讐の妨害である確率が最も高いと思うから、こうして犯人捜しをしている——そうか」

「どうしたの?」

「犯人捜しは、別に必要ないかもしれないな。僕たちは復讐さえできればいいんだから。今から部屋にこもって、明日の朝まで何があっても出ないと決めておけば、犯人は手の出しようがない。犯人が誰であっても、明日は復讐に出られる。いっそのこと、そうする?」

雨森が口を閉ざすと、沈黙が下りた。誰も答えようとしなない。雨森がため息をついた。

「ダメだったか。反対する人間が犯人かと思ったのに」

「その手には、乗らないよ」江角が片手を振った。「でも、犯人捜しをやめるのも、どうかと思う。昨日の話では、中道殺しと西山殺しを、五人ずつで手分けすることになった。でも今は六人に減ってるから、三人ずつになる。三人つてことは、犯人一人対二人つて構図になるだろう。一対二だったら、十分殺せる」

「片方はそれで防いでも」千里が反論する。「もう片方は殺しちゃうじゃないの」

「犯人は、それでいいかもしれない。たとえば瞳さんは、中道は死

んでもいいけど西山に死なれるのは困るという立場だ。もし瞳さんが生きていて犯人だったら、自分はさりげなく西山班に入って、西山殺しを妨害して、中道殺しを放置したかもしれない。そうしたら、西山が次期社長になって、ライバルも消せる。ばんばんざい 万々歳だ」

千里が訝しげな顔になった。

「瞳さんみたいにフウジンブレード側の人間が、まだいるって？」

「いる可能性はあるよ。瞳さんが西山の味方というのだから、十分予想外だ」

「江角さんの考えが正しければ」絵麻も考えを整理した。「犯人は、中道側の人間なのかな。西山側の人間だったら、瞳さんを殺すわけがない」

「そうかもな」江角も認めた。「一橋さんは笛木の部下だった。瞳さんは西山の身内だった。三人の標的のうち、二人に関係者がいたわけだ。もう一人、中道の関係者がいても不思議はない。ちよつと、できすぎだけどね」

「べつに、一橋さんは身分を隠していたわけじゃないでしょ」千里が抗議した。「一橋さんは、フウジンブレード側じゃなくて、敵対してたんじゃないの」

千里は、一橋に思い入れがある。それがわかっている江角が、片手を顔の前に立てて、謝る仕草をした。

「もちろんそうだ。事実、一橋さんは裏切るどころか、復讐に必要な情報を提供してくれたし、実際に動いてくれた。一橋さんは功労者だ。フウジンブレード側であるはずがない。あくまで、あえて笛木につながる関係者を探したら、一橋さんしかないというだけだよ。一橋さんが敵側だなんて、まったく考えていない」

千里の表情が変わった。怒りから、困惑へと。江角の発言の真意が理解できない。そんなふうに見えた。

千里の反応を気にすることなく、江角は視線を千里一人から全員に移した。

江角が座っているのは、テーブルの窓側の奥だ。出入口を背にしている絵麻とは、ちょうど対角線の位置にいる。そのため、彼の動きはよく見える。江角はゆっくりと生き残ったメンバーを見回した。

「でも俺たちはすでに、お互いの素性すじょうすら信じられなくなってる。素性を隠して近づいてきたのであれば、フウジンブレードへの復讐心を持っているとは考えづらい。逆に、妨害に来たと考えるのが自然だ」

「裏切り者というより、敵だね」

沙月が冷え冷えとした口調でコメントする。「裏切るのは、味方だよ。はじめから違う目的で参加したのなら、敵。味方になったことがないのなら、裏切り者じゃない」

沙月の言わんとするところは理解できる。共に復讐を誓った仲間が、たとえばフウジンブレードに買収されて転向したのなら、裏切り者だ。しかしスパイとして潜入したのなら、ただの敵だ。

「つてことは、瞳さんも裏切り者じゃなくて、敵つてことか」

「そうなるね」

「そうとも限らない」

沙月の肯定に、雨森の否定が重なった。沙月が訝しげな顔をする。

「つていうと?」

「前から言っている」雨森があらためて説明する。

「瞳さんが西山の身内なのは、間違いないだろう。奥さんなのかもしれない。でも、だから西山の意を受けて潜入したとは限らないだろう。夫婦だからこそ、本気で西山を殺したくて仲間入りしたのかもしれない。まさか『夫を殺したいから』と宣言するわけにもいかない。だからフウジンブレードへの恨みをでっち上げた。実は僕は、その可能性の方が高いんじゃないかと思ってる。だって、今まで瞳さんから何らかの妨害を受けたことなんて、一度もないんだから」

「なるほど」沙月が酷薄な表情に戻った。「わたしは、元旦那を殺したいとは思わない。でも殺そうとする人たちがいたなら、少なくとも止めることはないからね」

ものすごい科白せりふをさらりと吐いた。そして江角を見る。

「江角さんはどうなの？ 奥さんといい別れ方はしなかったって言うってたけど」

「俺は嫁よめを殺したいなんて思っ
てないよ」

否定しながら、遠い目になった。「でも、嫁が俺を殺したいほど憎んでいたとしても、不思議はないと思ってる」

生真面目まじめな返答に、沙月が黙った。

「話を戻そう」

雨森が口を挟んだ。「このまま犯人を放置していたら、いざ復讐を実行する段になって妨害される危険がある。江角さんが言いたいことは、そういうことだったよね」

江角は今までの経緯を思い出すように、宙を睨んだ。「そう。そのとおりだ」

「でも、中道と西山の二人を殺すためには、どうしても二手に分かれなければならない。多勢に無勢で犯人を取り押さえるのは難しそうだ。だから今のうちに犯人を特定してしまいたい」

「うん。合ってる」

「とはいえ最初の一橋さんから、さっきの瞳さんまで、誰にでもできたことがわかっている。警察のような捜査手段を持たない僕たちは、そこから一步も進めていない」

空気が揺らぐような気配があった。

正面の沙月だ。沙月が目を見開いたのだ。何か気づいた。そんな感じだ。しかし口は開かない。

雨森は沙月の変化に気づいたのか気づいていないのか、沙月に關心を持つことなく話を続けた。

「だったら、この中の『誰が犯人か』じゃなくて、『誰が敵か』を考えるって手もある。瞳さんみたいに運転免許証から一発でばれるほど簡単じゃないかもしれないけど、全員で全員の持ち物検査をすれば、何かわかるかもしれない」

「わたしはいいけど」絵麻は、雨森の正しさを認めながら、それでも反論する。「反論しなければならぬ」。

「賛成はできないな。たとえばこの中の誰かが、生理用品とか持ってたなら、どうするの。男に生理用品を見られるのがどれだけ嫌なところか、雨森さんにはわからないでしょ」

「うん、わからない」雨森は素直に認めた。「あれかな。隠していたエロ本を母親に見つかった感じかな」

「それは、こっちがわからない。でも、似たようなものかもね」
「恥ずかしいとか嫌だとか言っている場合じゃないだろう」

江角が怒ったように言う。「復讐がかかっているんだ。持ち物検査に、俺は賛成する」

「あら」千里が大げさに驚いてみせる。「江角さんは、エロ本を持つ

てきてないんだ」

「ないよ」江角がうんざりしたように顔になった。「ようやく復讐が
かなうって局面だぞ。エロ本なんて見てられるか」

それは、あまりよくない発言だ。

絵麻はそつと亜麻音を見た。エロ本を見るどころか、笛木を殺し
た後、亜麻音は吉崎とセックスしている。非難されたと感じていな
いだろうか。

亜麻音は表情を変えていなかった。しかし強張こわばっている。それも
当然か。しかし不快感を表に出してしまうと、自分のやったことが
ばれてしまうと思えば、隠さざるを得ない。

雨森は、彼には珍しく不安そうに亜麻音を見ていた。亜麻音が爆
発するのではないかと恐れているのだ。

千里もまた、亜麻音をちらりと見た。こちらは、反応を窺ってい
るといったところ。

江角は亜麻音の方を見もしない。わざと無視しているというより
も、素で関心がないのだ。おそらく、自分の発言が亜麻音に与える
影響など、考えもしていない。笛木を殺害した後に吉崎と亜麻音が
セックスに耽かへっていたことを吹聴ふいちらようしたのは、江角自身なのに。

沙月もまた、亜麻音を見ていなかった。しかしこちらは、自分の
考えに沈み込んでいるからこそその行為に思えた。

沙月は、いったい何に勘づいた？

沙月の意識が現実に戻ってきた。「そうか」

千里が沙月に顔を向ける。「どうしたの？」

沙月は千里を無視するように雨森を見た。

「ひよつとしたら、持ち物検査は必要ないかもしれない」

雨森が小さく首を傾げる。「っていうと？」

沙月は真剣な顔をしていた。いつもの冷笑を含んだ酷薄さが、影を潜めている。

「わたし、さっき言ったでしょ。部屋に引っ込んでから動くのは、他の人にばれないよう、静かに殺すのが目的だって」

「ああ、言ってたね」

「それはそのとおриだと思っ。でも犯人は、そんなに静かに殺せると、本気で思ったのかな。大立ち回りしなくても、多少のドタバタは覚悟しなければならいでしょう。隣の部屋に聞こえるとは、考えなかったのかな」

「えっ」千里が虚を突かれたような声を上げた。「それは、どうなんだろう」

「この壁はそれほど薄いわけじゃないけど、大きな声なら聞こえる。これはフウジンブレードが福利厚生費をけちって安普請やすぶしんしたわけじゃないと思う。ホテルだって、高級ホテルじゃなければそんな

もんでしょ。実際、江角さんは吉崎さんの部屋から、大きめの声が聞こえたと言ってた」

亜麻音の身体がびくりと震えたが、沙月は無視した。

ここでようやく江角が亜麻音に視線を向けた。すぐに逸らす。

「あ、ああ。言つたよ」

沙月の目が光った。

「誰なら殺せたかを考えると、誰にでもできたという結論になってしまう。でも、誰なら殺せると思つたかを考えると、絞れてくる。

わたしが言いたいののは、犯人が多少の物音は気にしなくていいと考えてたんじゃないかってこと。犯人は、どこで殺したの？ 吉崎さんの部屋と、菊野さんの部屋でしょう。思い出して。階段を上がつて右側の列は、手前から吉崎さん、江角さん、菊野さん、一橋さん、空室、笛木。吉崎さんの部屋も、菊野さんの部屋も、江角さんの部屋の隣じゃないの。犯人は、犯行の音が江角さんに聞こえると心配しなかったのかな。逆に言えば、心配しなかったからこそ、犯行に及んだ。心配しなくていいのは、一人しかない。つまり——」

沙月はそつと言った。「江角さん」

全員の視線が一斉に江角に向けられた。ただの視線ではない。槍のような視線だった。

江角は身体を硬直させた。「な、な……」

言葉が出てこない。予想外の疑いうたがをかけられて対応し切れていないのか、それとも凶星すぼしを指されたからか。

予想外というのは、絵麻も同様だった。沙月の指摘は、今までまったく考えもしなかった考え方だったからだ。

そして、江角自身と同様、反論できない。大きな声なら隣の部屋に聞こえると言ったのは、江角自身だ。それなのに、江角は隣室から怪しい物音が聞こえたなどという証言をしていない。その理由はふたつ考えられる。ひとつは、犯人が隣の江角に気づかれないよう、静かに殺人を実行したから。もうひとつは、江角自身が物音を立てたから。

反論できないのに、絵麻の理性は賛成できずにいる。仲間うちで、最もフウジンブレードに対して敵対心を露わにしていたのは、江角だった。打ち合わせの際に、必ず亡き息子の遺影いゑかをテーブルに置いたほかに。

それが偽りいつわだったというのか。自分たちと共に復讐計画を詰めておきながら、裏ではフウジンブレードと通じていたというのか。中道か西山の意を酌くんで、邪魔になった笛木を切り捨てる一方、残る二人の標的まらを護るべく、復讐者たちを殺していったというのか。

とても信じられない。けれど、沙月の仮説に説得されたのも、また事実だ。

そつと雨森を見る。雨森は、沙月の仮説をどう受け取ったのか。信じたのか、それとも信じていないのか。

雨森は驚愕の表情を浮かべていた。口が半開きになっている。まさしく、重大な発見をしたときの顔だ。雨森もまた、沙月に賛成したのだろうか。

「そっか」千里が口を開いた。江角から視線を逸らさずに。「他の人が犯人だったら、江角さんを気にして、隣の菊野さんの部屋は選ばない。犯人が瞳さんを菊野さんの部屋に呼び出したのは、瞳さんが菊野さんに思い入れがあったからじゃなかった。廊下を上がって右側であれば、自分の部屋以外ならどこでもよかった。自分が部屋を移動するところを見られるリスクを最小限にするために、隣の部屋がよかっただけ。吉崎さんと菊野さんなら、菊野さんを選んだ。ただ、それだけのことなのか」

ガタガタツと音がした。江角が急に立ち上がったため、椅子が立てた音だ。

「ち、違——」

反論は、別の音によってかき消された。うなり声だ。マグマが沸騰するような声。一瞬、誰のものかわからないほど、異様な響き——
亜麻音だった。

亜麻音が音もなく立ち上がり、江角に向かってダッシュした。亜

麻音と江角の間には、吉崎の席がある。そこは今、空席だ。亜麻音は何の障害もなく、江角に向かっていった。

二人の身体がぶつかった。亜麻音の突進を、動揺していた江角は受け止めきれない。押し倒されるように背後に倒れた。ごん、と頭が床にぶつかる音が響く。

「いかんっ！」

雨森も立ち上がった。沙月の背後を回って倒れ込んだ二人のところに向かう。

遅かった。

雨森が到着する前に、亜麻音が隠し持っていたナイフが、江角の首を捉えていた。

江角の首から勢いよく血液が噴き出し、亜麻音の顔にかかった。

〈つづく〉